豊橋図書館から移管された資料について

東亜同文書院大学記念センター ポストドクター　　武井　義和

今年6月、豊橋図書館から東亜同文書院大学記念センターへ、段ボール1箱分の資料が移管されました。1902（明治35）年から1906（明治39）年頃までの、東亜同文会京都支部、ならびに同支部が経営していた「清語講習所」に関するものが中心です。

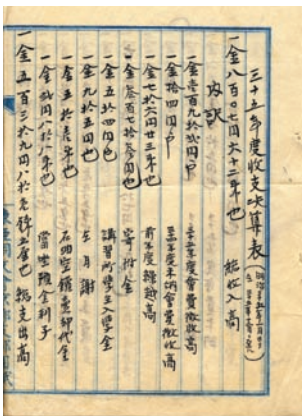
東亜同文会（1898～1946年）は、愛知大学の前身にあたる東亜同文書院（1901～1945年、1939年大学に昇格）を経営していた団体ですが、京都支部や「清語講習所」については『東亜同文会史』（霞山会発行、1982年）に断片的に現れる程度で、詳しいことは殆ど分かっていません。そのため、このたび移管された資料は、埋もれた歴史に光を当てる大変貴重なものだといえます。

資料数は整理の仕方により若干異なってきますが、現時点では273点ほどにのぼっています。分類すると①「清語講習所」関係、②出納関係、③東亜同文会入会・退会関係、④京都支部主催の談話会などの案内類、⑤名簿類などに大別されますが、これ以外にも名刺や電報などがあります。この中で特徴的なものを2点ほど取り上げ、簡単にご紹介したいと思います。

資料1は、1902年度の京都支部収支決算表です。団体の活動を知るには、収支がいくらか、どういう目的で使われたかといった予算面の考察も重要となります。したがって、この収支決算表はそうした角度から、京都支部の内実について明らかにし得る資料です。ちなみに、この年は「清語講習所」が設立されたため、支出の多くがそれに関する項目で占められていたことが確認できます。

資料2は、1902年から1904年の間に提出された、「清語講習所」への入学申込書の綴りです。これを見ると、志願者の殆どが京都市内在住者であったことが分かります。講習所は午前の部と夜間の部があり、修学期間は2年でしたが、速成科は3ヵ月で、また随時入学が認められていました。講習所自体の実態を解明することはもちろん重要ですが、入学志願者たちの職業や課程修了後の人生、受講生と教員ならびに受講生同士の人間関係（人的ネットワーク）なども、資料をもとに研究を進める上で重要な視点になるかと思います。

当分の間は保存状態を確かめつつ、さらに整理を行う関係上、未公開とさせて頂くことになりますが、将来的には何らかの形で多くの方にご覧頂けるようにしたいと思っております。



資料1

資料2